

自由民主党 中央政治大学院
まなびとスコラ・オープン講座
憲法に学ぶ「この国のかたち」

第2期「まなびと夜間塾」特別講座

2021年7月1日

講師：後藤 謙次 白鷗大学名誉教授、
共同通信客員論説委員、ジャーナリスト
テーマ：「中曽根・竹下・宇野総裁時代（昭和から平成へ）」

過分なご紹介いただきまして、ここにやっ来てまいりました。今日はいろいろお話しすることが多いですから、一番心配なのは、時間が足らなくなるのではないかと、思っております。私は団塊の世代、昭和 24 年生まれで、今年、間もなく 72 歳になりますけれども、共同通信に入ったのは 1973 年、オイルショックのあった年であります。そして、本社の政治部に来たのが 1982 年、政権で言いますと鈴木善幸内閣（第 70 代）の時に政治部記者になりました以来 39 年ですか。ずっと永田町を観察し続けたと、そんな日々を送っております。

当初、82 年に、今日のまさにテーマになります鈴木内閣、突然、我々の目の前から鈴木善幸さんが退陣するということになりまして、次の後継者を作らなければならない。これは多分この前のいろいろな講師の方がお話しされたと思いますけれども、鈴木善幸さんは、大平正芳さんが衆参同日選挙に打って出、その参議院選挙の公示の日に発作を起こされ、そして約 2 週間後に他界される。激動の衆参同日選挙の中で、次の後継者をどうするのかという話し合いで決まったのが鈴木善幸さんだったのです。その話し合いを大きくリードしたのは田中角栄さんであります。まさに戦後の日本の政治家を代表する、徒手空拳で、一気に天下統一へと昇りつめた。その田中さんが 76 年／昭和 51 年にロッキード事件で逮捕される。総理を辞めた後ですけれどもロッキードで逮捕された。この十字架を背負いながら、しかもなおかつ自民党の最大派閥を率いる。そういう政治状況の中で国の政治をどう動かしていくのか、そのせめぎ合いがずっと田中角栄さんの逮捕後に続いてきたのです。

まさに私が田中番をやっていた時に田中角栄さんは脳梗塞で倒られたのですけれども、我々に必ずおっしゃっていたのは、とにかく「自分が裁判闘争をしているのは、自分が有罪無罪ではないのだと。日本の内閣総理大臣の権威を守るのだ。そのためには死ぬまで戦うのだと」ずっとおっしゃっていたのですが、そのためにはやはり権力中枢を握らなければならない。そういう思いが強かったのだと思います。

ですから、ご自身でも言っていましたけれど、自分は「自民党の周辺居住者」だと。つまり自民党員でないにもかかわらず自民党の最大派閥を率いる。ここからもちろん大きなエネルギーも発揮しましたし、同時に大きな矛盾を抱え込むという中で、76 年以降の自民党政治は、その葛藤の狭間に置かれたのではないのかなと思います。そして大平さんが亡くなられた後、田中さんの主導で鈴木内閣が誕生する。では鈴木さんの後をどうするか。当然、当時構想されたわけですが、その時に 2 人の閣僚を左右に配しました。2 人とも当時で言えば長官ポストですから非常に軽いポストだったのです。軽いと言っても政治家に

よって全てのポストの重み・軽さは変わってきますけれど、鈴木さんが起用した2人の実力者は、1人が中曽根康弘さん。その中曽根さんは行政改革を担当する、今やもうとっくになくなってしまいました。行政管理局長官に就任いたします。もう1人の実力者は、河本派を率いた河本敏夫さん。日本最大のタンカー運輸会社、郵船会社、三光汽船のオーナーでもある河本さんが経済企画庁長官。この左右の2人が鈴木善幸さんという、総務会長を長くやってきた総理大臣を支える、そういう構図が生まれました。

ただ、ここで中曽根さんが、ある面で非常にラッキーだったのは、大平さんが亡くなられた大きな理由は、79年の衆議院選挙の時に「一般消費税を導入」する。つまり、日本の財政再建のために日本初の大型間接税を導入しようと、これを試みたのですが、大平さんは昭和50年/1975年に三木内閣の大蔵大臣として初めて赤字公債を発行するわけです。今にして思えば、わずか2兆円です。ただ、自分は大蔵官僚から政界に身を投じた。それを恥じるということで、この財政の不均衡を正さなければいけないということで一般消費税導入を試みるわけです。選挙の時にはそれを撤回いたしました。最終的にそのことが尾を引いて79年の衆議院選挙、ちょうど台風ともぶつかって自民党が過半数を割り込み大敗する。

そこで、かつて総裁選で敗れた福田赳夫さんと大平さんがともに衆議院本会議場で雌雄を決するという、自民党史上かつてない、日本の政権政党史上でもないと思うのですが、「1つの政党から2人の首班指名候補が出る」。これが世にいう“40日抗争”です。この40日抗争の後に成立した内閣で大蔵大臣として入閣したのが竹下登さんでした。竹下登さんは持ち前の根回し上手を含めて、79年12月に「財政再建に関する国会決議」というのをまとめる。この国会決議が、その後の消費税導入のバイブルになるのです。その導入に至っては、まず「不公平税制を是正」しましょう。それから「行政改革を断行」して、日本の財政支出をとにかく減らしましょう。この第1項目にあった行政改革が、大平さんの後を引き継いで出来た鈴木内閣で、土光敏夫さんを会長とする「土光臨調」（第2次臨時行政調査会）が生まれまして、土光臨調は中曽根さんが主管大臣になって行政改革を邁進する。

当時、土光敏夫さんは経団連会長を務められて、メザシを朝食に摂ると。今、メザシは大変な高級品ですが、当時は庶民の味方で、「メザシの土光」と言われた。このイメージと一緒に、行政改革が国民運動になったのです。中曽根さんご自身も言っていますが、「行革ライダーに乗って自分は天下を獲った」と。つまり行政改革の追い風の中で中曽

根さんは、めきめきと頭角を、もともと頭角を現していたのですが、国民的な人気の高い内閣総理大臣候補になっていくわけです。

そして2年後に、鈴木善幸さんが突然退陣する。我々は当然、鈴木善幸さんは続投すると思っけていまして、私も行政管理庁で、何と中曽根番をやっておりましたので、総務庁から今は総務省になりました高速道路の脇の合同庁舎の行官庁の記者クラブのベッドで横になっていましたら、鈴木さんが退陣すると、キャップに呼び出され、あわてて飛び込んでいったことがあるのです。

そこから、今この自民党の4階に総裁室があります、その総裁室の中で、まず話し合いでやろうということになりまして、田村憲久厚生労働大臣の伯父さんに当たる田村元さんという人が、福田赳夫総裁・中曽根康弘内閣総理大臣、いわゆる「総理・総裁分離論」というものを提唱するのですが、田中角榮氏が「そんなものは蹴飛ばせ！」と言って一気に総裁選になだれ込んでいきました。

当時の総裁選、今では考えられないのですが、推薦人の数は、なんと50人です。しかも党员の数300万~400万人近い。システムが全く違いまして、まず予備選というのをやって、党员投票で上位3人が決選投票に臨む、そういう選挙制度だったのですけれど、私も行政管理庁長官番として中曽根さんの総裁選にずっと全国遊説について回りました。最後、投票になった時、断トツ1位は中曽根さん、次いで河本敏夫さん。この時に安倍晋三さんのお父さんの安倍晋太郎さんも出て、最下位は中川一郎さんでした。今でも憶えていますのは、中川さんが夏に、ひょっとしたら総裁選に出るかもわからないと田中角榮さんのところへ挨拶に行きましたら、「池の鯉は外に飛び出したら戻れないこともあるぞ」と、それぐらいの激しい総裁選だったのですね。

結果として中曽根さんが圧勝し、2位以下は全員辞退をする。そこで中曽根内閣が誕生するのですが、私は行政管理庁長官番がそのまま内閣総理大臣番になるという非常に運に恵まれましたけれど、特ダネがいっぱいありながら逃した連続だと今でも寝られないぐらい悔しい思いをずいぶんいたしました。中曽根さんが、ある時、ビニールに入れたテープレコーダーを我々の前に持ってきて、我々って私と時事通信の記者の2人ですが、今ハングルを勉強しているのだと言うのですね。「大変ですな」とか何か適当なことを言っていたのですが、そこに瀬島龍三さんが紋付き袴で現れまして、何かな、と思っけていました。ただ、総理番やってわずか2か月ですから、何も気がつかずにそれを見すごしてしまっけてのです。年明けになりましたら瀬島龍三さんが中曽根さんの特使として、密使ですな。韓国

に飛び立って、初めての韓国訪問を取行する。我々は、私も伊豆半島の今井浜で中曽根さんの正月の静養に付き合っていましたけれど、てっきり訪米がイの一番だと。現に今井浜から帰ってきて、番記者も一緒に映画に行くぞと見させられた映画がスピルバーグの「E.T.」だったのですね。これはハリウッド狙いだなと思いきや、突然、韓国訪問が発表される。それは多分、非常に戦略的に動いたのだと思います。まず韓国へ行ってから訪米する。

その前に鈴木内閣のとき“第1次教科書問題”とあって日韓関係が非常に乱れていたのですね。そこで、陸軍大学、恩賜の軍刀をもらった瀬島さん。この人も土光臨調の会長代行をやっていました。我々、何度も取材をしましたが、背筋をピンと伸ばした軍人そのものですね。この人が陸大時代のチョン・ドファン（全斗煥）とか韓国のリーダーたちのツテを使って、中曽根さんのまさに訪韓の地ならしをした。

これが中曽根内閣なのですが、こればかりやっていると、これだけで終わってしまいますので、申し訳ありませんが…。ただ、中曽根さんは、「蹴飛ばせ」と言った田中さんの田中派の支援によって総裁選を勝ち抜くわけです。ですから、総理大臣に就任した時には“田首相になったら中曽根内閣”と言われたのです。福田赳夫さんは、田中曽根の“田”の字を取らなければダメだというような、角福戦争がそのまま残された。しかも中曽根さんは50人の推薦人が集められなかったのですね。49人しかいなくて、最後に石川県の無派閥だった稲村佐近四郎さんを借りてきて推薦人50人を満たす。ですから総理大臣にはなったものの、大きな派閥の陰に隠れて政権を運営しなければならない。つまり「田中離れ」というのが内政的に中曽根さんの大きな課題だったのですね。我々の前でも、大学ノートに首相になったらいろいろやりたいことを書き連ねてきたと言っていますが、政治は大きな力がなければ政策を前に進められません。そこで田中離れをいかにするかというのが中曽根さんの裏側の大きな使命で、自分の目指すべき方向だと思っていたと思いますね。

そして83年に選挙が再びやってくる。つまり79年、80年と二度続けて衆議院選挙がありましたけれど、ぼちぼち任期満了が近づいてくる。田中角榮さんのロッキード裁判の第1審判決が近づいてくる。そして83年という年はまた参議院選挙が巡ってくる。田中角榮さんは、衆参同日選挙をやれと。選挙の地盤を固めて自分の裁判の第1審を受けるという構図を描くのですが、当時、中曽根さんが起用した後藤田正治官房長官、この人が目白に行って衆参同日選挙を田中角榮さんと協議をするのですが、中曽根さんはそれを拒絶するということになりまして、参議院選挙は単独で行われました。

そして、いよいよ田中さんの判決が出るのです。10月に田中判決が出て、その判決の後、

中曽根さんは議員辞職を迫るのです。ホテル・オークラのスイートルームで、中曽根・田中会談ありました。私もホテルの下で待っていましたが、結局、物別れに終わり、そのまま一気に選挙へ突入する。これが83年の“ロッキード判決選挙”と呼ばれている選挙ですが、ここで自民党は大敗します。過半数割れをします。割れるのですが、田中角栄さんは二十万票を得て田中派だけが残る。当然自民党の中に大造反が起きる。しかも過半数割れをした。そこで当時の田中六助幹事長、私が最初に幹事長番をやったのは田中六助さんです。田中さんは糖尿病で、ほとんど目が見えなくなり、最後は入院生活で表舞台から去っていくのですが、その田中六助さんがクロネコヤマトの宅急便のトラックに乗って目白（田中邸）に乗り込み、ロッキード事件の時に自民党を出て、つくられた「新自由クラブ」の河野洋平さん、河野太郎さんのお父さんとか、山口敏夫さん、田川誠一さん、この新自由クラブとの連立を模索する。ロッキード事件の時にできた新自由クラブと連立するので、また田中さんの了解を取りに行く。こういうことが起きました。そして当時の中曽根さんは“中曽根書簡”というのを出しまして、田中氏の影響力排除というのを書かされて、ようやく政権の維持ができる。

ただ、この83年の選挙は自民党が非常に苦戦したのですが、そこで初当選した人が今、自民党の最重鎮として皆さん残っているのですね。例えば二階俊博幹事長、大島理森衆議院議長、そして甘利明税調会長、こういう方々は全員83年。今日の司会をやっていただいた中谷元先生は平成に入って最初の衆院選、90年の2月ですか、ここも多士済々。私は政治家の選挙って当たり年があるのではないかなと思っています。83年の10年後、自民党は野党に転落しましたが、安倍晋三さん、野田聖子さん、岸田文雄さん等々、今の自民党を支える人たち、みんな93年。野党に転落した年の当選した人が意外に多いのですね。やはり苦戦した時に頑張って当選してきた人たちは、中谷先生の時もその前の年の89年の参議院選挙で、消費税で自民党が大負けし衆参ねじれ国会が誕生した翌年、自民党が政権を失えば消費税がまたゼロに戻るといってその選挙で当選された時代に当たります。河村建夫さん、石破茂さんも、確かこの年だったと思います。

この83年の選挙を超えて、ようやく中曽根さんは、ふらふらになりながらも政権維持を続ける。ただ、中曽根さんは非常にしたたかで、田中さんに世話になりながらも何とか影響力を排除しよう。1つは政策を前に進めるということです。田中角栄さんの最大のウィークポイントは、自分の権力を維持するために「田中派から後継者をつくらない」。他人を担ぐ。そのために圧倒的な数を持つ。それまで自民党の総裁形成軸は3つの派閥の連合

体が基本だったのです。田中角榮さんが 100 人を超える派閥を形成したことによって、田中派+1 で政権ができるようになったのです。この流れの中で中曽根さんはもがきながらも次を目指す。田中さんのウィークポイントは後継者を作らないことにあったのですが、あえて田中派の将来の有望株の竹下登さんを大蔵大臣に起用し、さらに安倍晋太郎さんを外務大臣に起用し、歳も当選年次もやや上だった宮澤喜一さんを要職である総務会長として起用する。こうして“安竹宮”（あんちくみや）、次の世代はこちらですよと、田中さんを徐々に真綿で首を絞めるように追い込んでいくという状況を作ったと思います。

そして私も体験いたしましたけれども 84 年に総裁選がやってきて、この時は田中角榮氏の影響力を排除しようということで、なんと“趣味は田中角榮”と言っていた二階堂進副総裁を担いで中曽根さんを追い落とそうという動きが出て、これが“二階堂擁立劇”です。これも話していると 1 日終わってしまうのですが、この二階堂擁立劇を鎮圧したのが金丸信という竹下さんの後ろ盾だったのですね。ここから竹下さんが徐々に力を持っていくのです。その年の暮れに秘密会合が開かれて、翌年の 2 月 7 日、竹下さんは「創政会」という議員集団を田中派の中に作りました。これに田中角榮さんは怒って怒って怒りまくりました。

私は、田中角榮さんが倒れられる 2 週間前に 2 月に目白で田中さんに会いましたけれど、そのとき朝からオールドパー、ほぼストレートなのですが、当時（政務秘書の）早坂茂三さんが「おやじさん、水割りにしてください」と言ったら、コップから水を 1 滴したたらせて「これで水割りだ」と言って、またグイグイ飲んでいくのです。なぜかいつも目白に行くと鰻重とおいなりさんが出るのですね。この組み合わせは、いまだに意味不明です。しかもおいなりさんにも醤油をつけて食べる。これは大変だなと思っていたのですが、2 月 27 日、この日ですね、田中さんは脳梗塞で倒れてしまうのですね。

これも新聞記者として私の中で、失敗談の連続ですが、義理の息子さんの田中直紀さんと、その 27 日、会合を設けていたのです。けれども、待てど暮らせど来ない。直紀さんは当時福島 3 区から当選してしまして、福島 3 区の有力者が来るので今日はちょっと会合に遅れると言って、ずっと来られなかったのですね 27 日。おかしいなど。ただ、秘書さんが、ちょっと気になるので目白に寄ってくださいと。私が秘書さんを乗せて、当時の新聞記者、お金はなかったのですが、車だけありまして、車で秘書さんを送ったら、目白の門が開いていたのです。田中邸は田中角榮が帰宅しない限り門を閉じないということになっていたのです。それをわかっていながら、おかしいなど気づかずに、疲れたので家に帰っ

て寝ましたら、朝イチのNHKのニュース速報で田中角榮氏入院ということになったのです。ここから田中角榮氏の時代が名実ともに終わってしまう。そこから中曽根さんがフル回転で自らの政策を実現していく。

そして、この85年というのは、ぜひ皆さん、もう一度、その時代を振り返って勉強していただくといいと思うのですが、戦後の仕組み、政治家の政治家像、それが全て85年によって大きく変わったと私は今も思っています。

85年はどういう年かというと、8月12日に御巢鷹山にJAL機が墜落しました。当時、自民党はてんやわんやでした。その直前に新自由クラブが解党し、自民党はまた元の一党支配に戻りました。そして8月13日、今でも憶えています、河本敏夫さんの三光汽船が戦後最大の負債を抱えて倒産する。そして8月15日、中曽根さんが初めて、これ1回きりだったのですが、靖国神社に公式参拝をする。靖国神社公式参拝と御巢鷹山の墜落。ぜひ皆さんに読んでいただきたいのは『クライマーズ・ハイ』という、群馬の上毛新聞の横山秀夫さんという、記者から作家になった人が書いた小説です。地元の上毛新聞が、飛行機の墜落事故と地元が生んだ内閣総理大臣の靖国参拝問題、その比重の中で迷い抜くという、我々新聞記者の生活を描いた小説で、これを読むと私は今でも躍動する思いに駆られるのです。

そして、この年の9月22日、秋分の日にニューヨークのプラザホテルでプラザ合意というのが行われます。私は竹下番を担当していましたが、その前日から竹下さんが、当時の番記者というのは四六時中、追いかけていますから見逃すことはほとんどなかったのですが、竹下さんが突然、東京からいなくなってしまったのです。いろいろな所、四方八方、手を尽くしても、見つからない。当時、長野の塩島大さんという政治家が亡くなって、お通夜に行ったのではないかと、そこでみんな納得して帰ったのですが、秋分の日の朝一番のNHKニュースで、ニューヨークのプラザホテルから、竹下さんが映し出される。ここで「円高調整」が行われたのです。

それまで日本経済は円安を背景に、とりわけ日米の貿易不均衡が最大の課題になっていまして、牛肉・オレンジ交渉とか繊維交渉とか個別の物品の交渉でしのいできたのですが、いよいよ為替を調整しなければ乗り切れない。アメリカはベトナム戦争後の財政赤字と貿易赤字、いわゆる“双子の赤字”が当時あって、この解消のために日本は協力しろと。これが“ロン・ヤス関係”、レーガン大統領と中曽根さんの関係。そして大統領の側近だったジェームス・ベーカーという財務長官、それから竹下登さん。このコンビがプラザ合意

をやって一気に円高に向かう。それによって翌年、日銀総裁経験者の前川春雄さんが作った「前川レポート」というのがありまして、これで「内需を拡大する」方向に、しかも円高不況になりましたから、どんどん日本銀行が公定歩合を下げ、世の中にお金が大量に刷り出される。それによって“バブル経済”が起きてしまう。そして中曽根さんは、自らの行政改革の柱であった、NTT（日本電信電話株式会社）をつくり、あるいはJT（日本たばこ産業株式会社）をつくり、こういう三公社（日本電信電話公社、日本専売公社、日本国有鉄道）の民営化を実現していくという年に入ってきたのが85年だったのですね。

そして86年、やはり今でも憶えています、初めて「東京サミット」が開かれました。この東京サミットで中曽根さんが議長をやり、いよいよ衆議院の任期切れが訪れる。衆議院の定数は正もやらなければならない。金丸幹事長もこの問題に取り組んで8増7減案というのができまして、これをどうするか。これまた喋っていると半日ぐらいかかりそうなので…。

ここで、当時の藤波孝生国対委員長が「針の穴にラクダを通すより難しい」と言っていた、空白の1日を利用して衆参同日選挙に持ち込んだのです。これが86年の選挙でした。そして自民党は300議席、圧勝するのです。これがまた総裁選の直前でした。300議席の圧勝した自民党総裁をここで辞めさせるわけにいかないだろうということで、幹事長に就任した竹下さんが各派、当時、いろいろ大きな派閥がありましたから、一斉に根回しをして、話し合い調整で1年間の“ボーナス任期”というものを中曽根さんに献上する。中曽根さん自身は、2年が当たり前だと思っていたらしいのですが、次はそういかないよということで中曽根さんは1年の任期を終えて、翌年また総裁選が巡ってくるわけですね。今は総裁任期3年になりましたが、当時は2年ごとですから。2年ごとに、しかも激しいバトルが繰り返される。そして竹下さんが、最初に申し上げたように、「財政再建に対する国会決議」を引っ提げて自分が就任すれば財政再建をやるという形で名乗りを上げる。一方、安倍晋太郎さんも名乗りを上げる。宮澤喜一さんも名乗りを上げる。3者の総裁選になるのです。

ところが、この3人が、将棋の王将戦みたいに、全国でそれぞれ討論をやるのですが、最後に決着つかず、中曽根さんに全ての指名権を与える“中曽根裁定”という形をとって次の総理大臣を決める。ただ、この時に、戦さ構えをとっていたのが竹下派だったのです。圧倒的に数を背景に中曽根さんの指名を勝ち取るというのが当時の金丸さん・竹下さんの戦略で、その流れに沿って、最後は、自民党4階の総裁応接室で、当時、竹下さんが幹事

長でした、幹事長が立候補するとなれば行司役には相応しくないということで伊東正義総務会長、会津の「頑固山」などと言われた伊東正義さん、当時宏池会からの総務会長が、その裁定文を読み上げて竹下さんが誕生する。そして竹下さんは、79年にまとめ上げた国会決議に沿う形で、最後の砦だった消費税導入に自らの命を懸ける。

ところが、この消費税を国会にちょうど提出する頃からリクルート問題が浮上しました。当時、先ほど申し上げたように自民党の総裁選は非常にお金がかかる。しかも選挙は中選挙区制である。最後、北海道1区は6人になりましたが、基本的に3~5人の当選者になる選挙ですから、派閥がしのぎを削る。党のお金だけでは足りない。自前でお金を用意する。それに沿う形で当時、日の出の勢いだったリクルート社の江副（浩正）というオーナーが、値上がり確実な未公開株を政治家および政治家周辺、官僚、メディアでもらった人もいました。そこにばらまいて、それがリクルート問題・事件となって破裂する。つまり消費税を抱えながらリクルート問題で、竹下さん自身にもリクルート問題が後で襲って来ました。そして9月18日、大相撲の9月場所、天覧相撲の取り止めから始まって、翌19日、今でも憶えています、昭和天皇が大量の下血をされて病に臥せられ、ちょうどソウルオリンピックも重なっていたのですが、徐々に徐々に体力を消耗され、それと同時に消費税法案の審議が進む。12月に入ると、昭和天皇の御容態がますます悪くなる。リクルート事件も大きく進展をする。最後は、宮澤副総理・大蔵大臣の秘書さんにまつわるリクルート問題が炸裂して、宮澤さんが大蔵大臣を辞任する。消費税が成立する直前に副総理兼大蔵大臣は辞任し、竹下さんがそれを兼務しました。かつて竹下さんは長く大蔵大臣をやりましたから、大蔵大臣をやりながら総理大臣をやる。まあ面白い性格といえますか、お人柄の総理でしたから、大蔵大臣の記者懇談とか記者会見のために、わざわざ大蔵省まで行ってやるというサービス精神を発揮しながら、そして12月24日、クリスマスイブの日に消費税法案が成立するのですね。

これを私は本に書きましたが、竹下さんと12月24日に代沢の私邸でお会いした時に、「天皇陛下が頑張ってくださったおかげで、消費税は成立することができたのだ…」

確かに、あのとき仮に、竹下総理、もちろん在任中ですがけれども、消費税が成立する前に昭和天皇が崩御／御逝去されていたら、多分そこで国会審議はストップしたと思うのです。これを見届けるように、竹下さんが消費税の成立に漕ぎ着ける。その前年の中曽根さんの指名の時も、竹下さんと中曽根さんの間で密約があったのです。総裁選が行われて総理大臣指名選挙の間までに、昭和天皇が当時、初めて昭和天皇は昭和62年に外科の手

術を受けたのですが、その受けた直後の総裁選だったのですね。もし天皇陛下の身に何かあれば、中曽根さんが総理大臣を続け、竹下さんは総裁に留まる。「総・総分離論の密約」がそこで成立していたのですね。それをクリアして、薄氷を踏む思いで、「官記」と呼ばれる天皇陛下からの総理大臣任命書、この任命書には4人のお名前があるのです。裕仁、昭和天皇のお名前です。それから昭仁、今の上皇です。そして中曽根さんと竹下さんの名前。1枚の総理大臣任命書に4人の名前があるという、極めて珍しい官記と呼ばれるものがあるのです。それはまさに昭和天皇が入院されて、当時の皇太子殿下が職務を代行されていた。その時代の反映の書が残っているのです。消費税の成立とともに昭和は、昭和64年1月7日に昭和天皇が亡くなられて、まさに時代が終わる。その時代の極めて微妙なタイミングの中で消費税が成立する。そして4月1日から消費税が導入されて今日に至る。

ただ、消費税の成立と同時にリクルート事件がどんどん拡大してしまいます。労働省や文部省の当時の事務次官も逮捕される。野党の党首も連なる。藤波元官房長官も在宅起訴されるという状況の中で、当時、初めての消費税のもとに平成元年度予算が国会審議にかけられていたのですが、審議そのものが行われないうことで4月25日、予算成立を条件に竹下さんは自ら退陣を表明しました。

ところが、当時有力な後継者がほぼ全員リクルート問題に絡んでいたのです。つまり有資格者がゼロになってしまった。さあ、どうするか。先ほど申し上げた伊東正義さんがイの一番の筆頭だったのですが、伊東さんは「表紙だけ変えてもダメだ、中身を変えなければダメだ」と自らの就任を固辞され、ご自身は自民党に政治改革本部をつくる、これを遺言にして伊東さんは拒絶する。では誰を総理大臣にするのか、ということになるのですが、そこで竹下さん退陣の後に大きな案件が2つあったのですね。1つは消費税を軌道に乗せる。大蔵大臣だった村山達夫さん新潟3区選出、それと外務大臣だった宇野宗佑さん。外務大臣はその年の7月14日、今でいうパリ祭の日ですが、この年のパリ祭はフランス革命200年に当たるという、極めて重要なサミットだったのです。これに日本としてどう取り組むのか。日本は当時、唯一経済発展を遂げた珍しい状況にあったのですけれど、このサミットをこなせるのは外務大臣、消費税をやれるのは村山大蔵大臣、この2人で1人、しかも当時の自民党の序列から言うと、暗黙の慣行があったと思いますが、後継総理は自分より若い人間に渡さない、下に渡したボールは戻ってこない、上のボールなら落ちてくる時にもう1回、自分が掴めるかもしれない、そういう暗黙のジョークとも本音とも取れるものがありまして、村山さんも宇野さんもほぼ竹下さんと同世代なのです。同世代に譲

ということ、自分たちの影響力の可能性を残すという意味で、非常に重要な選択だったのです。

そして今でも憶えています、竹下さん6月3日に退陣し、翌日、ある場所で、一緒にテレビを見ていたら、映像に映し出されたのが「天安門事件」だったのです。まさしく中曽根さんが、先ほど申し上げた85年／昭和60年8月15日の靖国公式参拝、当時の最高実力者の1人だった胡耀邦という総書記が中曽根さんと非常に友好的な関係があつて、この公式参拝を許容したのです。そのことがもとで、中国国内で徐々に影響力を失い、そして89年、胡耀邦氏が亡くなった後に、大きな民主化を求めるデモが起きたのです。その延長線上に天安門事件が起きる。米欧各国は中国制裁を行う。アルシュ・サミットは、フランス革命から200年を経て、「中国問題が最大の課題」になったのです。その意味では今回のコーンウォール・サミットと非常に似ていたのです。中国問題が最大のテーマになる。

この時に、宇野宗佑さん、外務大臣から総理大臣になりました。ただ、当然、竹下さんの影響力が非常に強く残っていたのです。そこで日本の外交方針は、中国批判の嵐の中で中国孤立化を招かないという制裁決議は、賛同するけれども緩和するという道筋を取ったのです。今の日米関係と全く別のコースを当時とりました。そして、宇野内閣はその年に終わってしまうのですが、先に申し上げますと、9月になって初めて日本の国会議員団が世界のどの国よりも早く北京に向かうのです。議員団長が奥田敬和さん。ナンバー2が渡部恒三さん、そして3番手が二階俊博さんだったのです。二階さんは今でも中国に行けば習近平国家主席がイの一番に会う。これは恐らく中国が国家的な危機の時に日本が中国に手を差し伸べて、真っ先に中国を訪れた二階さん、井戸を掘った人、もちろん田中派の流れを汲むということで、それを遇したのではないかなと思います。

宇野内閣は、アルシュ・サミット、パリ郊外のアルシュという新興都市で行われたサミットなのでアルシュ・サミットと呼ばれていますが、ここに行ったことと、短い69日間の政権でしたが、もう1つ大きな成果を残したのは、「政治改革推進本部」というのを作ったのです。この短い期間に。その本部長が、先ほど申し上げた伊東正義さん、そして本部長代行に座ったのが後藤田正治さん。この2人が今の小選挙区比例代表並立制の基礎を作ったのです。つまり、あそこから始まった。しかも小選挙区を初めて唱えたのは竹下登さんだったのです。リクルート問題に遭遇し、今でも憶えています、89年1月、当時ブッシュ大統領、お父さんの（パパ）ブッシュがアメリカの大統領に就

任したとき、最初に呼ばれたのが日本の総理の竹下登さんだったのです。今回バイデン大統領が初めて呼んだのは菅義偉現内閣総理大臣。それと非常によく似ていまして、菅さんも令和の元号を掲げた時代の節目と訪米。竹下さんはブレアハウスという迎賓館が改修されて初めて泊まった賓客でもあったのです。今回も菅総理はブレアハウスに泊まられたようですが、ブレアハウスに泊まって、日本に帰る途中、この辺はいかにも竹下さんですが、私も同行しました。帰りにロサンゼルスに寄りまして、レーガン事務所に寄るのですね。ブッシュさんの就任に伴って退陣したレーガン前大統領の労をねぎらうため、ロサンゼルスに寄ったのです。この辺はいかにも心配りの竹下さんらしかったのですが、そのロサンゼルスのホテルで当時日本はバブルで、日本の企業が買収したホテルだったのですけれども、総理大臣内政懇談というのがありまして、そこで竹下さんは、政治改革で政権交代が行える緊張感が必要だと、初めて小選挙区制導入に触れ、そして宇野さんへの申し送りで政治改革推進本部をつくる。それが今日の「小選挙区比例代表並立制」につながる。ここから先は、次の方のテーマになるので、私は昭和から平成へという時代の中で、「人とシステムと全てがこの 80 年代に変わった」。ただ、そこで生じた課題はいまだに解決されていないというのが私の認識です。消費税が導入されて、もう 30 年以上たちます。しかし、いまだに消費税率を元に戻そうという議論もあれば、軽減税率というこれまで我々は想定もしなかった税率が導入される。そして竹下さん以降、消費税に 1 本でも指を触れた政権はことごとく退陣してしまうという歴史があったのです。竹下さんはもちろん退陣しました。宇野さんはそれを引きずった上に参議院選挙で惨敗し、衆参ねじれ国会を生むのです。その後、消費税に手を付けたのが、なんと細川護熙さんだったのです。

竹下さんは当時、消費税導入に当たって、最初に“先行減税”という大きな減税をやったのです。その穴埋めをしなければならぬ。93年に自民党が野党に転落して初めて成立した細川護熙政権で、消費税とは違う、いわゆる福祉を目的とした新たな「国民福祉税」を設けようと細川さんが提唱して、それは一晩で消えてしまいましたけれども、それによって細川内閣は瓦解し、羽田内閣を経て村山富市さんが社会党の委員長として初めて内閣総理大臣になりました。この村山さんが、なんと消費税率を 5%にするという税法を作ったのです。この村山さんも参議院選挙で社会党がほぼ壊滅状態で敗けてしまう。そして実際に村山さんの作った法律で消費税率を 5%にした橋本龍太郎内閣、ここも消費税によって内閣退陣に追い込まれる。

その後、消費税は政権与党および総理大臣にとってタブーとなり、小泉さんに至っては「私の内閣の時には消費税を絶対上げない」と宣言しました。政権担当能力・経験のまだ薄かった民主党政権が果敢に挑戦し、菅直人さんはそれに触れただけで参議院選に敗れる。そして野田内閣は「社会保障と税の一体改革」に取り組んで成立させたのですが、無残にも野党に転落する。最後、安倍晋三さんは政権を野田さんから引き継いだ後、消費税率8%への引き上げは法律通りにやりましたが、その後の2015年10月からの10%への再増税については2014年の衆院解散に際して2017年4月に1年半延期されることになりました。さらに2017年4月の税率引き上げも2019年10月に2年半延期されました。その際には食料品などのついては8%に据え置く軽減税率が導入されました。いまだに消費税は今日的課題であり続けると言えると思います。

いろいろなことを申し上げて、まだまだいろいろなことを申し上げたいと思いますが、今、日本に残っている外交課題の1つで「北方領土の問題」、それから「北朝鮮の問題」。これも80年代に最初に手が付いたのですね。今でも憶えています、89年／平成元年に竹下さんが国会で初めて北朝鮮を“朝鮮民主主義人民共和国”と呼んでから、翌年の金丸訪朝が実現し国交正常化交渉が始まる。しかし、その後、拉致問題も表面化して、今日、非常に困難に至っていますけれども、「いまだに80年代の課題が全く解決できずにいるというのが日本の政治であり」、ぜひ政権与党たる自民党に奮起していただいて、この困難な課題、政権の1つ2つ飛んでもかまわないからやり抜くという覚悟をもって、政治に取り組んでいただきたいなど。ただ長いだけ永田町にいる人間として、それだけ申し上げて終わりたいと思います。あと半日でも1日でも喋り続けますけれど、「もうそろそろ終わり」という紙が出ましたので、この程度で終わらせていただきます。

どうもご清聴ありがとうございました。

(この回おわり)